

室生犀星全集

第五卷

新潮社

室生犀星全集 第五卷

昭和四十年八月六日 印刷
昭和四十年八月十日 發行

著 者 室 生 犀 星

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(總)二二(大代表)
振替東京八〇八番

定價 一五〇〇圓

室生犀星全集

第五卷

題
字

編
纂

西
川
寧

奧 福 伊 窪 中 三
野 永 藤 川 野 好
健 武 信 鶴 重 達
男 彦 吉 郎 治 治

第五卷
目次

小説

女の圖	九
復讐	八〇
貴族	一三七
哀猿記	二四四
山犬	二六五
山犬續篇	二七九
洞庭記	二八五
醫王山	三〇六
あにいもうと	三二〇
續あにいもうと	三三三
神かをんなか	三五〇
チンドン世界	三六三

隨筆・評論

〈茱萸の酒〉

信濃追分の記……………	三八三
廢驛坂本町……………	三八八
蝨蜥の記……………	三九二
ルナアルの歌……………	三九六

〈文藝林泉〉

京洛日記……………	三九七
文藝雜記……………	四〇〇
庭のわかれ……………	四〇〇
馬込林泉……………	四二六

*

古いおもちや……………	四四六
蜂やトンボは心中しない……………	四四七
冬 夜……………	四四九
小さいものから……………	四五〇
野生の小鳥……………	四五〇
鐵の死……………	四五二
輕井澤の雨……………	四五五
秋深い日……………	四五六
京濱國道……………	四五九
大學と藥罐……………	四六〇
駒込倫敦……………	四六二
本郷通り……………	四六六

後記

都會の底……………中野重治……………四七

解題・校訂……………伊藤信吉……………四七

結城信一

小說

女の圖

第一章 輝かしい一瞬

伴宗八は一種不思議な人物ではあるが、伴の妻のハナも變つてゐるといへば事々に變つてゐる女であつた。そして伴や伴の妻ををちさんをばさんと呼ぶところの少女はつえも、充分に風變りな女の一人であつた。伴は明治末葉のこちやついた世相のなかで誰でも遣つたやうに、仕事から仕事の間をハリガネ渡りをして歩いた男で、焼鳥屋、蟲屋、靴なほし、硬質陶器、バナナ賣、こはいろ屋を経て、千九百十年代には千束町のゴミ溜の間に新聞縦覽所と名づけられる、奇怪なその實は純粹な淫賣屋の主人にまで出世してゐた。千九百十年代の千束町の家々の屋根の上にのつそりした十二階の煉瓦塔が立つてゐてこの都會のそらにフイリツシヤン・ロツプスの怪畫

を打展^{うちひら}げ描いてゐた。伴の女房のハナも此のゴミ溜の酸^すっぱい女たちの間に噓^{うせ}ふほど白粉^{おしろい}を塗りこくつて、やけくそな荒唐^{あたら}穢^せきに若い時分の一番肌のいいところを擦り減らした女であつた。ハナは時々得體^{えたい}の分らぬ程平常の何でもない茶話から昂奮して來ると、まだ十六になつたばかりの貰ひ子のはつえと、十一になるきくえの前で、したたか酔^よつぱらつた人間がならべるご託のやうな語調で喋^{しゃべ}り立てるのであつた。「ざつと見つもつて二千くらになるかも知れないわ。學生職人旦那方といふ見境のない男たちが……靴穿^{くつぱ}きのまま通りやがつて氣儘^{きまま}仕放題^{しはだい}さ。八九百圓の稼^{かせ}ぎで體驅^{からだ}ちゆう金で光らないところなんてなかつたものだ。金ぶち眼鏡に金の入齒、指環は勿論時計から墓口の口がねまで疼くやうな好い色をした奴で塗りこくつたものさ。お前がたのやうに兄さん唄はしてよ十錢、兄さん踊らしてよ十錢でひと晩かかつてブリキの屑のやうな奴がほんの七八つとは、時勢も違ふが情けない話

さ。」

貰ひ子、繼子、私生兒、捨兒、そんなものの臍の穴にこほろぎが温まつて鳴いて、子供は臍の穴が擦つたくなり一層ぎあぎあと街裏の家々に泣きわめいてゐた。はつえは左の耳の下に七針、右の手首とお臀に鈍重な古い傷跡を持ち、そんな裏街できくえと一緒に育つて來たのであつた。あたひ達は本統の姉妹ぢやないわよといひ慣れた言葉はやはり法律上でも本統の姉妹ではなかつた。もとより伴宗八の娘でも何でもなかつた。だからはつえは伴をぢさんと呼び、ハナををばさんと稱んでゐた。伴も妻のハナも、はつえの父親がどんな商賣をしてゐてどんな顔の男か見たことがなかつた。母親だけは養育費の長たらしい交渉關係から知り合ひ、ハナは絞れるだけ絞り上げて飽きなかつた。そのうち女は型のごとくドロンを決めてしまつたのである。きくえの場合もそれと同じいきさつを踏んでゐて、これらの少女達の親はどんなに詳細な手續きを履んで見ても、もはや生長したはつえやきくえに邂逅ふことができないであらうと思へた。はつえもきくえも、自分の親達なぞのことを聞いたためしがなく、人間は教育次第で餘り親のことなぞを尋ねたがらないものらしく、尋ねても分らない筈のことは子供はちゃんと先に知つてゐるほど惻巧なものであつた。

夕暮れの一瞬はこの都會の形相を美しい險惡なものに突き

落し、町の果に汚れた泥の付いた二疋の金魚が泳いでゐた。

鉛と混凝土の道路は幾何學的にくねりに紆曲つて花火のやうに裝飾電燈をとまず家々を、ぎつしりと二側にならべて道路自身が生きて何か藝當をしてゐるやうなものであつた。二疋の金魚はどんでん廻りのドアの間からちよろちよろ泳ぎ込み、そして又ドアの間から泳ぎ出ると待ち構へた道路はそれを次から次へと皿廻しのやうに、騒々しい店々の内部におくり込むのであつた。どこにも酔つぱらひの客が破裂するやうに笑つて笑ひ抜き、もう笑ふ事がなくなると急に怒り出すのであつた。お酒を呑むといふことは嬉しい事情があればあるで旨いものであり、悲しい事情があればあるで旨いものであると聞いてゐたが、大抵はこの泥の金魚がはいり込むと客はちよつとの間だまつて澄し込んで五月蠅さうに尻眼にかけてゐた。十錢玉を出すのが惜しいからだつた。だが第二番目の瞬間には大抵の客は幾らか見直すやうになりこいつあ別嬪ぢやないか、笑ふと脂肪までが甘えて見えやがる。可愛らしいといふより法外な惡戯をして遣つてこんな怒らして見ると面白いものと客はおもむろに巫山戯散らすのであつた。もつと此方へ來い十錢くらゐは何でもない、ほう！ 十六におなり遊ばすのかい、お嬢さんの名前ははつえと申されるか、もとははつえと申されるか、はつは初の字だな、えは枝のえだな、ああ好い名前だ何ておほこ臭い名前だ藝名では

ないのだな、藝名はいかん藝名ちふものは遍く卑しくていかん、ふふん！ 十六か！ お勝手から隅田川が見えるといふんだな、瓦を積んだ船だの發動機船だの材木船だのが見えるといふんだな。船の中で可哀想に赤ちやんが泣いてゐるといふんだな、では尻の赤い螢は居らんか、いやはや隅田川の泥鰌のお腹から縫ひ針が出たり舌を噛み切つて蜆が自殺したり、十二時五分で停つたきりの時計がうじやうじや川底に沈んでゐたり、あの川の底は百鬼夜行のやうなものだ。いまに豚の木伊乃も出て来るだらう。何だもう一遍いへ。豚なら此處にも居ますわと來やがる。何處にゐるといふのだ。ほう！ 成程、旨いことをいふ奴だおつばいを豚だつて旨いことをいふ奴だ、あはあははは！ 旨いことをいふ奴だ。何といふ名前だ、いや先刻聞いたな、はつえと申されるのだ。初の字とえは枝だ。十六になつたのだ。去年は十五であつた。十五といふ年の人には戯談もいへないやうだが、十六になれば萬事あらかた心得たものさ。いよう！ そこにも一人ちびさんがゐるな、何んといふ肥れないちびだ。さうさ姉妹ぢやない正眞正銘のあかの他人が時々屢々そんな姉妹のやうに暮すことがあるものだ。さあ出て行きたまへ。「豚ならここにも居ますわ。」と來やがつた旨いせりふのお嬢さん、もう出て行け。酒の肴にならなければ用なしだ。出て行かなければ追ひ出すと女給だちが言つてゐる。金は金のある奴から貰つて歸る

さ！

泥の付いた金魚はちよろちよろ泳いでドアの外にこぼれ出ると、悄氣てふんぶん怒るのであつた。何て厭らしい酔つぱらひの極道野郎、自動車に挟まれて潰れてしまへばいいと思ふのであつた。あんな奴には此方から十錢入れて遣れれば遣りたかつた。だが道路は大きな團體を持ち上げて金魚の背後からのしかかり、金魚はまた店々のドアに江り込み追ひ出されて行かなければならなかつた。はつえは紋切型で節のある聲でいふのであつた。「唄なら何んでもおうたひいたしますわ。お寶は五十錢でも十錢でもいいわ。しつこく言はないから早く唄はして頂戴。」「きみたちの唄には飽々さ、唄なんぞうたはなくていいから、さつさと此處から出て行つてくれたまへ。」さういふかと思ふと、「あ、鳥渡顔を見せろよ。これは稀らしい別嬪さんと來てゐる。笑つて見てご覧。へえ！ こいつあ掘り出し物のかばちやと違はあ、生ちろいところは些つと苦みのある淋しさがあつて其苦みと來たら堪らない澁いところがある。そら大きな英吉利にだつてない五拾錢玉を一枚上げよう。だからそこで覺えてゐるだけ唄つて此方いいといふまで、立つてゐるんだ。立つたままで居睡りしたつて關はないのだ。三十分ごとに大きな光つた奴を出さう。さうさおれの子供は一つで死ばりやがつたが生きてゐたらお前のやうに、稼がせるつもりであつたのに、嬢の手落ちで焼いて

見ると骨は燐寸箱に一杯しかなかった。それでも齒があつたぜ！ 齒が！ この不孝者の餓鬼が一つやそこらで何か固いものを食ふ氣でゐやがつた。おれは畜生めといふ氣がしておれの齒で噛み碎いて嚙み込んでやつた。おれは燐寸箱をボケツトにしまひ込むと一たい何處へ行つて劍つくを食はしたら氣が済むだらうと、そこらを造つて廻つて歩いたのさ。ござの子、夜の赤蛙、苦み走つためろん面！ もつと大きな聲で唄へ。お前達の親は何處にゐる、母おやはどこで今頃ぬくぬくと寢てゐやがるのだ。食へもしないのに齒なんぞ齒ぐぎの中にしまひ込んで、おれの子供は、あばあばあばと言つたきり、弱よわのやうになくなつて死くたばりやがつた。死ばりやがつたら蘇生いふからなかつた。おれはおれの赤ん坊に言ひ分がある。何故齒なんぞ見せたかといふ言ひ分がある。もう出て行け！ 風邪をひかないやうにはツつき廻つて、そこらちゆうの酔つばらひ共にさんさん弄もよほり物にされへトヘトになつて何處へでも歸つて行け！ 畜生！ 苦み走つた顔をして人の顔をじろじろ見やがつて、うるんだ長い睫毛まつげをときどき鷹揚にふうはりと眼の上に蓋をして、ひよつとして、惚れでもしたらどうなるのだ。惚れることで氣の短かいおれはどう處置をしたらいいのだ。十六だつて母おやになれるから恐ろしいのだ。出てゆけ擬まがひもののお母さん！ 畜生！ 愚圖々々うろつてゐると背後から噛みつくぞ。」

金魚は後になり先きになり二疋であつた。水はドロドロだつたから喘ぎ方が荒くなり道路は濕つたところがかちかちに凍こて上り、乾いてゐるところは亞鉛トインのやうに滑すべつこいのであつた。あたのお股のところまで鞭むちが切れて仕様がないわ。しまひにお腹までひびが切れるかも知れないわと大きいのが言つた。小ちやいのが今川焼でもたべないことと言つたが、おでんの方がいいわと大きいのがこたへた。

有樂町のガードぎはの川ぶちにある空地はゴミやら俵やら紙屑やらで、片一方は煉瓦のガードの塀になり北風をふせいでゐて、些つと人眼につかない夜は温かい溜り場であつた。高架鐵道の建物にびつたり食つついて、大きな懷爐の上に襟巻をかけて炬燵たきだのやうにこしらへ温まつてゐる二人連があつた。二疋の金魚はこんばんはいふとその襟巻のそばに蹲またかんで、おお寒いと言つて手をさし入れた。そんなことに慣れてゐるのか男だちはだまつてポリポリと何か豆の様なものを噛んでゐた。鰻うなぎが金魚だちも分けて貰つたのであらう口をうごかし出した。だいぶ時間が経つてから、金魚だちは温まつたのか、死んでゐたやうになつてゐたのが少しづつ動き出した。一人の男が立つて何處かへ行つて了つた。あとにまだ青年になりきらない男が、一人だけ残つたが、大きい方の金魚はびつたりと寄り添よきうて蹲むと、男はいたはるやうに自分の方に改めて引き寄せるやうにした。大きい金魚は聲をはずま

せ甘えるやうに今夜あたいたても嬉しいのよと言つて男の美しい顔をまじまじと眺めた。青年になりきらないこの男の顔は白い色といひ眼付といひ唇までが、そつくり女のやうに匂はしいものであつた。只、激しい險を含んだ上脛が一重に切れ上つてゐるところに、この男のただ者でない優しい險惡さを見せてゐた。――今夜ね、とても面白いいんちき野郎に出會したのよと金魚は男の顔とすれすれに顔をよせて喋り出した。唇が眞白になる迄飲んでゐたつけが些はんの烏渡もつときり唄はせてから、お前の様な顔はいますぐにでも母親になりさうだ。だから女ツて代物しろものは嫌ひなんだ。おれの子供は赤ん坊のくせに死くばつたとか何とか言つてしまひにひと掴みお金をくれたのよ。悲しさうであつたが言葉がとも荒かつたわ。あんないんちき野郎でもお金はあるらしいわね、だからその内から少し上げてもいいのよ。そのいんちきさんの手から貰つた時にすぐにあんたに少しお祝ひに上げようと思ひつたのよ、女給さんたちは總立ちになつてそんなことをなすつては、この子どもらは癖かたにして困るからと言つてとても騒いでゐたわ。あんな女だちを對手かたにしてゐるんぢやなくてお客が對手なんだもの。わたしはふふんといふ様な顔付をしてやつたわ。するといんちきさんの言葉が振るつてゐるぢやないの。こいつに遣るだけはきみだちにも置いてゆくから騒ぐなといふの。數へて見たらくしやくしやな五圓のお紙幣きつもまじつて

ゐて十圓近くあつたわ。だからそのうち五圓あげるわ。ほら五圓のお紙幣よ。ね好きなものを買つて頂戴。わたしとても嬉しいの。だから女だちの前を意氣揚々として引き揚げて來たわ。耳がなんか火みたいに火照はてつたわ、でもこんなに一度にどかつとお金のはいることなんか滅多にないんだもの、滅多どころぢやない絶対にないといつてもいいくらゐよ。あんなに上げようと思つてそればかり考へてゐたわ。さあ、取つて頂戴！ 大きい金魚の言葉つきは甘つたるくてとろとして融けさうであつた。男は顔とは不似合な太い濁だい聲でそいつは有難いな、きみから小遣を貰はうなんて全く考へたこともないよ。貰つとくよ、そんないんちき野郎はこれからあともきつと遣はなつきに場ばン場ばに出てくるだらうから、もう一遍くらゐありつけるかも知れないよ、氣をつけてそいつら行きさうなところを嗅ぎつけるんだ。併しそれもきみのこれが（大きい方の金魚の顔を指さきでついて見せた。）物をいはせるやうになつたのさ。では今夜はもう仕事をしに歩かないのだらうね。可哀想にまだ顔おもてへてゐるぢやないか。男はふたたびいたはつて優しい顔をして見せた。お金をもらつてから餘あままり嬉しいのと寒いのとで顔おもてへが歇とまらないの。それに菊橋さんのそばにくると何時もかうなのよ。見つともよくない顔へたりなんかしてね。でも今夜逢へてよかつたわ。逢へなかつたらお金のしまひ場所がないんですもの。どうしたらいいか

困つたところよ。家ぢや仕事からもどるとすつかり裸になつて袂や帶のあひだまで調べられ、五錢玉一つだつて縫ひ込むことも出来ない程きびしいのよ。だからお逢ひできなかつたら煉瓦の穴にでも突き込んで置くつもりだつたわ。——男はそいつは危ないそんなことをしたら直ぐ盜られるよ。それより此の子がお金のはいつたことを知つてやしないかと、先刻から俯向いて何時のまにか寝込んで了つた小さい方の金魚を顎先で杓つて見せた。幾らか餘計貰つたくらゐるは勘づいてゐるかも知れないけれども、あんなにとつさり貰つたことなんか夢にも知らないわ。ただ、此の子はよく狸寝入りをして何でも聞いてゐることがあるから餘り大きい聲では言へないけど、……彼女は二三度小さい方の金魚の名前をためしに呼んで見たけれど、寝込みが深くて起きなかつた。このくらゐ寢て居ればもう大丈夫よ、ねえ菊橋さん顔よく見せて頂戴、わたし何だか無性に嬉しくてならないわ。あんなに何時かは一遍くらゐ何か買つて上げたいと、そんな空ろ考へばかりしてゐてその願ひが遂々叶うたかと思ふと嬉しくて泣きたくて、ごめんなさい。大きい金魚はとつぜんに啼き出して了つた。そりやきみの氣持はよく分るよ僕も感謝してゐるよ。いまま僕もまじめに夜學校に通ふやうになるよ。笹龍膽の徽章のついた制帽をかむつて學校に出てゆくよ。夜學だつて卒て了へば鐵道の方ではつかつて呉れるんだ。こんなやくざだけ

れど今に何かになつて見えるよと菊橋は大きい金魚の背中をなでさすつて遣つたが、彼女はそんな學校なんか出なくともいいから、勉強なぞどうでもいいから毎晩ここで逢つてくれればそれで澤山なのよ。そして稼いでお小遣錢くらゐはあたゐが持つて來てあげるから、夜學なんぞに出ない方がいいわ、夜學校に勉強しに行くやうになれば學問があるやうになるとあたゐなんか直ぐに厭がられて終ふわ、そんなの詰んないわ。このままの菊橋さんで澤山なのよ、學校なんかに出なくともあんな學問があるわ、本を読むことが好きだし英語だつて旨いちやないの、看板だつて新聞だつてあんなに上手に英語が讀めるんですもの、いまに本だけ讀んで居れば學者になれるわ。あたゐ今まで通り逢つてさへ貰へばそれだけで澤山だわ。偉くなんぞなつて貰ふと却つて怖いわ。あたゐ稼いで本くらゐ買へるおあし持つてくるわ。だから逢つて頂戴。いままで通りに逢つて頂戴。それだけのお願ひよ。今夜のやうに嬉しいことないわ。嬉しくて嬉しくて喉が酸っぱくてガタガタ震へてゐるわ。ほら！こんなに前齒と前齒がかちかち觸れ合つて音がするでせう。これ、あたゐの嬉しい時の證據が聞えるでせうと、大きい金魚の胸は餅のやうにくたくたになつて、のほせたお喋りは美しい早口で際限もなく囁られ繰り返されるのであつた。そして未だ青年になりきらない薄ひげを見せた美しい男の顔は、寒い空氣のなかでその肉つき